

〔書評〕

橋本正志著 『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』

楠井清文

本書は、著者が一九九七年から二〇一六年にかけて発表した、中島敦に関する論考を中心にまとめたものである。中島は一九四二年九月、南洋庁編修書記としてミクロネシアに赴任し、「島民」と称された現地住民対象の「国語読本」編纂に従事した。その経験が、中島の文学活動全体の中で大きな意味を持ったことは、周知の通りである。昭和作家における〈南洋〉体験の重要性については、既に木村一信氏が浩瀚な『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社 二〇〇四・四・一〇）で指摘した所である。著者は恩師でもあった木村氏の視点を継承しつつ、これまで「国語読本」編纂の過程、その背景にある当時の日本語教育を巡る動向について、丹念な調査を積み重ねてきた。もちろん、それは中島の〈南洋行〉という経験の質を測る上で不可欠な手続きだった。本書は、そこに新たな二つの軸を加えることで、主題の深化と広汎な視点からの分析を試みている。それを明らかにするために、まず本書の構成を示す。

まえがき／凡例

序論 中島敦の〈南洋行〉

第一部 〈南洋行〉に至るまで

第一章 「北方行」論―漂泊する〈ことば〉の源泉―第二章 〈漢詩〉論―家学の衰頹と〈不遇意識〉のかたち―第三章 「小笠原紀行」論―〈南洋〉との邂逅―

第二部 〈南洋行〉の時代

第一章 〈南洋行〉論（一）―国語教科書編纂と〈届かぬ声〉と―第二章 〈南洋行〉論（二）―〈学習者不在〉の論理の中で―第三章 〈南洋行〉論（三）・補遺―せめぎ合う〈教育理念〉と現実―

第三部 〈南洋行〉を経て

第一章 「籬」論―〈公学校教育〉への批判の方法―第二章 「マリヤン」論―〈南洋島民〉の虚像と実像―

第四部 〈南洋行〉前後を結ぶもの

第一章 「山月記」論―遙かなる〈異境〉への漂着―第二

章「朱塔」論―(江南)の幻影をめぐる葛藤―

第V部 補説・研究の周辺

第一章 阿部知二の〈ジャワ〉―「火の島」にみる日本語教育観の形成―第二章 石川達三の〈南洋行〉―「南進日本」の向こう側―第三章 「日本語を学ぶこと」の意味―〈対話〉へ向かう中国入学生のことば―第四章 近代日本のアジア体験の言説を読む―関連分野の書評より―

結論 〈遍歴〉することの意味

南洋群島関連文学作品年表

参考文献一覧／初出一覧／あとがき／索引

本書で示された第一の軸は、「同時代社会における〈文学〉と〈日本語教育〉との交錯の様相」(五頁)という共時的な視点である。中島の編修書記としての経験は、阿部知二・石川達三・釘本久春ら他の文学者や文部官僚の動きと関連づけられることで、時代性・社会性を持ったものとして捉えられるようになる。

本書が示すように、一九四〇年以降「大東亜共栄圏」構想の下で「南進」政策が推し進められ、共通語としての日本語が重視されると共に、南方占領地でも宣伝・宣撫の手段として日本語教育が用いられた。一九四一年に設置された編修書記は、「南洋群島の「国語」教育政策をより時局に即したものに編成し直していく」(二〇五頁)現地の動きを受けたものだが、同年には釘本らを中心となり文部省主導で日本語教育振興会が組織される。つま

り、「内地」(中央)においても「着々と「大東亜共栄圏」構想に立脚した「外地」への「日本語普及」政策の推進を目的とする組織編成と理論構築が実践されていた時期」(二〇六頁)だった。

そして教科書編纂者としての中島は、現実に南洋群島の風土や生活に触れ、公学校で「島民」教育に当たたる実務担当者との協議も踏まえながら、「国語の普及徹底と皇民化」という大方針に「学習者不在」の論理を見、違和感を強めていった(第II部)。先行研究でも日本語教育に対する中島の批判的姿勢は論じられてきたが、本書の特色は、そのような「疑問」が生じていった過程を、「中島個人の見解」に帰一させるのではなく、当時の「国語読本」編纂事業の枠組みの中に位置づけた点にある。中島が直面したのは、「島民」教育政策の構造的な問題」(九七頁)だったのである。

視線を転じれば、同様の問題は、占領地ジャワで軍宣伝班員として日本語教育に当たっていた南方徴用作家・阿部知二も抱えていた(第V部第一章)。著者は、単行本『火の島―ジャワ・バリ島の記』(創元社 一九四四・七・三〇)所収の随想が、日本語教育振興会の機関誌『日本語』や陣中新聞『うなばら』に掲載された、日本語普及に関する議論を踏まえていると指摘する。そこには「日本精神」を体現したのもとして日本語を捉え「伝統」を重視する保守的立場と、語学教育の観点から学習者の便宜に基づいた改変も止む無しとする実際の立場との対立があった。しかし阿部は、どちらにも与せず、両者の「調和」を提唱した上で、

「我々は他民族の人らをして、日本語を、日本を、真に愛せしめるやうに立ち振舞はなければならぬ」と訴える。著者は、ここに「日本人は「他民族」に日本語を学ばせることを前提に、日本語をいかに普及すべきかといった議論に終始しているが、それ以前に「他民族」に愛される日本人、日本語とは何なのか、また、ひいては「他民族」が自ら習得を望む日本語とはどういうものなのか、といった本質的問題」（傍点原文・以下同じ 二二四頁）への省察を見る。

中島と阿部は、それぞれ異なった形ではあるが、「学習者」（ここでは「他民族」）の日本語に対する意識が顧慮されないまま、日本語教育が大方針として推し進められていく現場に立ち会い、その軋みを経験化することで、その後の文学活動に繋げていった。このような視点は、これらの論考よりも発表時期の早い「日本語を学ぶこと」の意味」（第Ⅴ部第三章）で述べられた、著者自身の中国での日本語教授体験と密接に関わりがあると考えられる。ここでは作文指導を通して触れた、日本語を学ぶ中国学生との複雑な内面の声の一つ一つを取り上げ、そこに日本・中国に向けた「対話への意志」を見る。そして我々がその声を十分聞き届けようとしているかを自省する。

日本で無意識の内に流通している日本語は、中国ではどのような言語として人々の目に映っているのか。その日本語を学習する中国学生は、何を感じているのか。彼らにとって日

本語で表現することは、何を意味しているのか。そして、彼らが日本語で表現したものは、何なのか。（二五一頁）

言語それ自体の社会性・政治性を問うこの姿勢は、「外地」で日本語を用いて創作した文学者の営為を考える際にも、手放せないものだろう。複数言語の使用が登場人物の多角的な自己認識を生んでいるとする「北方行」論や（第Ⅰ部第一章）、石川達三の『赤虫島日誌』（東京八雲書店 一九四三・五・一五）における「島民」女性の「言葉をとまなわぬ、身体表現」（二三三頁）への着目にも（第Ⅴ部第二章）、同じ問題意識が底流している。

第二の軸は、中島の文学活動に対する通時的な視点である。特に〈南洋行〉以前に成立した漢詩・歌集など、作家活動に先立って書かれた私的なテキストのため、従来の研究史で本格的に取り上げられなかった作品の分析は大変興味深い。例えば歌集「小笠原紀行」について、背景となる小笠原諸島への観光ブームを指摘した上で、歌の配列に見られる「歌集としての構成意識」（七二頁）に着目し、異文化体験を通して「閉塞した自己の内面を乗り越えていく」（七五頁）物語を読み取っている（第Ⅰ部第三章）。また「朱塔」論では、先行する芥川龍之介『支那遊記』（改造社 一九二五・一〇・二〇）の直接の影響を受けて成立しながら、日中戦争の影という時代性も刻み込まれているとする（第Ⅳ部第二章）。これらの論考は、中島における「旅」の重要性について再認識させる。それと共に、「旅」の経験が、なぜ紀行文でなく歌

集という形式で定着されなければならなかったのか、今後究明が期待される所だろう。

本書で最も啓発的だったのは、漢詩に見られる世俗社会への反感や「不遇意識」が、「山月記」以降では「明確な〔批判〕」の私たちをともなった同時代批評」へと転化していったとする指摘（第一部第二章および第四部第一章）である。著者は「山月記」の主題を唐代の文人社会との関わりから考察し、李徴を自己の「性情」に拘る余り、同時代の社会から疎外され脱落していった人物と読む。そしてこのような「社会と自己との距離感」（一八七頁）という主題は、後の〈南洋行〉での、「時局」「時勢」に対する分析を伴った社会批判の受け皿を形作っていったとする。従来、李徴個人の心情に焦点が当てられることの多かった「山月記」論に、新たな視野を切り開くと共に、以後の作品との連続性も踏まえられており、文字通り本書の白眉である。

さて、〈南洋行〉以後の作品論は「雞」「マリヤン」の二篇である（第三部）。「南島譚」（今日の問題社 一九四二・一一・一五）には九篇の「南洋もの」が収められているが、中島の編修書記としての経験が色濃く反映された作品に絞ら込むことで、本書の主題に即した構成となっている。特に「雞」論は、以前発表を直に拝聴したが、今回改めて国語教科書編纂に関する論考と連続して読むことで、「公学校」教育への批判」という主題を明確に意識することができた。「島民」老人の「不可解さ」を強調する語り手が、それによって「島民」のことを「分つた」とする公学校の

「新任教師」（引いては多くの「内地人」の態度を批判しているという論旨は説得的である。「マリヤン」論でも触れられるような、「多様な言語的・社会的歴史性」（一六三頁）を有したパラオ社会への認識が、このような批判を可能にしている。

最後に、本書で多用される「異文化体験」という言葉に触れておきたい。ともすれば「異文化」理解は、耳触りのよい言葉（本書の表現を借りれば「空虚な言葉（スローガン）」）として、ただ聞き手の意識を通過するだけのものになりがちである。しかし、自分が属する社会や文化とは異なる場に身を置き、外来者として他者の言動や思考の根底にあるものを根気よく探り続けるのは、決して容易でない。著者は、かつての中国での体験を中島と重ねながら、次のように述べる。

反日的とひとくくりにされた中国人の中にも、学生、教職員をはじめ、心細く教壇に立つわが身を案じてくれた方々に、あれほどまでに多く出合い、また実際に日々の生活の中で助けられた経験は生涯忘れないだろう。そうして〈向こう側〉から生活者として日本の社会政治状況の一端をながめたことは、まさにかつて中島が〈外地〉において体験したことそのものであった（中略）〈外地〉を舞台にした中島文学を読んでいくことは、自分自身の異文化体験の意味を考えていくという個人的な問題意識と重なり、あらためてその偶然に驚いている（三四五頁）

ここから窺われるのは、テキストであれ生身の人間であれ、それらの発する「『対話への意志』のシグナル」を無視せずに、それらの言わんとすること・語ってしまったことを常に聞き取ろうと努める著者の姿勢である。再度本書の言葉を用いると「真摯」さ(三四六頁)ということになるだろう。

「中島の〈文学〉を(中略)作者の内的葛藤が刻まれた〈作品〉として捉え、一貫してその〈作品〉世界の表現的、作家的及び同時代意義を明らかにする」ことを目指し、「その文学的営為全体をいたずらに一方に均質化して論じることがないようつとめた」(「あとがき」という本書には、橋本氏の「真摯」な探求によって初めて闡明された、数々の卓見が収められている。また巻末の「南洋群島関連文学作品年表」や、本文で直接言及されていない資料も含む膨大な参考文献は、その着実な歩みを裏付ける土台であると共に、後進の我々に示した里程標でもあるだろう。

中島の他の作品との関連づけや、同時代作家間の比較といった今後の課題も指摘されているが(二七五―六頁)、まずは本書に示された認識を咀嚼し応答することで、氏の「対話への意志」に答えたいと思う。

(おうふう、三七七頁、二〇一六年九月、本体価格六八〇〇円)

(くすい・きよふみ 熊本信愛女学院高等学校常勤講師)